

Title	ヴァンベリー『中央アジア旅行記』の一節について
Author(s)	勝藤, 猛
Citation	大阪外国語大学学報. 77 p.135-p.139
Issue Date	1989-03-20
oaire:version	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/81226
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

ヴァンベリー『中央アジア旅行記』の一節について

勝 藤 猛

Comment on a Passage from Arminius Vambery's *Travels in Central Asia*

Takeshi KATSUFUJI

In the year 1863, Arminius Vambery, Hungarian scholar of Oriental languages, performed his expeditions full of dangers, due to natural and human factors. He disguised himself to be an Ottoman dervish in order to enter those Central Asian khanates which had closed doors against Europeans.

On leaving the Khanate of Khiva, he bade farewell to one Shukrullah Bay, who had helped him during his stay there. The old Khivite gentleman, who was acquainted with Westerners in his career as a diplomat, might have detected Vambery's identity, but he faithfully kept it in secret.

The Khan of Khiva, on the other hand, was simple-minded enough to ask him if he came back there and to introduce his envoy to the Ottoman Sultan. Vambery just answered him, "*Kismet*" (destiny), which is an usual expression of refusal in polite conversation among the Muslims.

The author tries to comment a few paragraphs from one of his valuable narratives of non-literate societies in Central Asia before the Russian conquests.

I ま え が き

アルミニウス・ヴァンベリー（1832-1913）はハンガリーの東洋学者、トルコ、アラビア、ペルシア諸語、およびイスラム教に通じ、1863年、トルコ人托鉢僧に扮して、当時西洋人に門戸を閉ざっていた中央アジア・アフガニスタンを旅行し、イギリスでその記録を出版した。その中の一節、63年6月2日、ヒヴァを去る個所について語学的・歴史的注釈を試みる。なお同年4―5月、トルコ

マン族の村、ゴムシュテペに滞在した時の記事についてのノートとして下記がある。

勝藤 猛「トルコマン族，1863年」（大阪外大法経学会『評林』XV，1988年4月）

Ⅱ 原 文

I went to take my leave of Shükruallah Bay, to whom, during my stay in Khiva, I had been under so much obligation. I was really deeply moved to see how the excellent old man tried to dissuade me from my purpose, sketching to me the most horrible picture of Bokhara Sherif (noble Bokhara). He pictured to me the policy of the emir as suspicious and treacherous—a policy not only hostile to Englishmen, but to all foreigners; and then he told me as a great secret that a few years before even an Osmanli, sent by the late Reshid Pasha to Bokhara as a military instructor, had been treacherously murdered by order of the emir, when he was desirous, after a stay of two years, to return to Stamboul.

This warm dissuasion of Shükruallah Bay, who at first had the most confident belief in my dervish character, surprised me extremely. I began to think, “this man, if he is not sure of my identity, still, having seen more of me, has penetrated my incognito, and now, perhaps, has some widely different idea and suspicion.” The excellent old man had in his younger days been sent in 1839 to Herat to Major Todd, and had also been several times to St. Petersburg. He had often, as he told me, frequented in Constantinople the society of the Frenghi, a source of great pleasure to him. What if, entertaining some idea of our real way of thinking—of our efforts in a scientific direction—he had, from some peculiar feeling of benevolence, taken me under his protection? When I bade him farewell I saw a tear in his eye—a tear, who knows by what feeling dictated?

To the khan also I gave a final blessing. He enjoined me to return by Khiva, for he wanted to send an envoy with me to Constantinople, to receive at the hands of the new sultan the usual investiture of his khanat. My reply was “Kismet,” which means that it was a sin to think of the future. We shall see what fate had in store. Bidding farewell to all my friends and acquaintances, I left Khiva, after having sojourned there nearly a month.

Ⅲ 旧 訳

本書には以前に翻訳が出版されており，筆者も一部手伝った。しかし今問題にしている個所には関係していない。岩村忍（1905-88）訳『中央アジアの冒険』やしま書房，1962年である。必要な部分を示す。

“訳者の序”の末尾：「私は翻訳については，私なりの一家言をもっている。文学書や読み物の

類の翻訳は、そのまま翻訳する必要はない。訳者が理解したとおりを、訳者自身の言葉で語ればよい、と考えている。本書も同様で、実は翻訳ではなく、部分訳でもなく、編纂か adaptation だといつてよい。本書の原稿の作成に当っては、故矢崎秀雄・滝嘉衛・勝藤猛の諸君に多大の協力をえた。ここに記して感謝の意を表する。1962年8月 岩村 忍」

本文の訳：

私は、ヒヴァ滞在中、世話になったシュクルラー・ベイのところへ、いとまごいに出かけた。この立派な老人は、聖都ボハラの実に恐るべき模様を、かいつまんで話し、私の計画を中止させようと努めた。私は大いに心を動かされた。彼は、ボハラの君主エミールが疑い深く、陰険であり、とくに外国人を憎んでいることを、諄々と話してくれた。そして「これは内々の話ですが」と前置きしてから、「三年ほど前のことです。トルコの先帝ラシード・パシャから軍事教官としてボハラに派遣されたオスマンリ人さえ、暗殺されてしまったんですよ。エミールの命令でね。そのオスマンリは、約束の二年の勤務を終わって、「イスタンブルに帰りたい」と言ったものですからね」

信じていたシュクルラー・ベイがこんなに一生懸命に諫止するのを見て、私はちょっとびっくりした。彼は私の変装を見抜いたのだろうか。1839年といえば、まだこの人の若い頃だったが、その年、彼はヘラートに赴いたことがあり、その後数回、セント・ペテルスブルクにも行ったことがあるそう。またコンスタンティノーブル滞在中は、たびたびフレンギー（ヨーロッパ人）の社交界にも出入りしたそうで、私たちのもつ科学性・合理主義についても理解があり、その方面の成果に大いに注目しているために、特別の便宜を与えたいという気持ちから、私を保護したいというのだろうか。私が最後のいとまごいを告げると、彼の目には一滴の涙が浮かんできた。——この涙がはたして何を物語るものか、おそらくそれは永久の謎である。

私はハーンにも最後の祈禱を授ける。彼は、帰りにもまたヒヴァを通るようにと言った。使節を私に同道せしめて、コンスタンティノーブルへ派遣し、新しいスルタンから、慣例に従ってこの国の封爵をもらおうと考えたのである。私は「キスメット（運命）のままに」と答えたのみである。これは、未来のことをとやかく考えるのは罪悪であるという意味である。はたしてどんな運命が私たちを待ちかまえていたろうか。

Ⅳ 語 釈

シュクルラー・ベイ＝ヒヴァの人、大使としてイスタンブルに10年駐在した。もう引退しているが、ヒヴァでは学識ある有力者である。あらかじめヴァンベリーは、ヒヴァの名士を調べており、このベイの名を聞いて、その人を利用しようとした。ヴァンベリーはイスタンブルで彼に会ったことがあるが、彼の方はヴァンベリーを知らなかった。ヴァンベリーはヒヴァに入るとすぐ、彼を訪問し、イスタンブル方言を使ってオスマン・トルコやイスタンブルの話をした。彼は大いに驚き、かつ喜び、ヴァンベリーを本物のイスタンブル出身者と思い、ハーンに拝謁させるなど、種々の便

宜を計ってくれた。

ヒ ヴァのハーン（君主）=Seid Mehemed Khan(原書の綴りのまま、在位1856-65)

「オスマンリ人さえ」オスマン・トルコのスルタンはカリフをも兼ね、この国はイスラム圏で宗教・政治の両面で第一の勢力をもち、その国民はイスラム教徒の間で尊敬されたはずである。

ラシード・パシャ=Reshid Pasha (1800-58) 1840年代、オスマン・トルコの政治家、「タンジーマート期」改革の指導者。上記訳語「先帝」は誤り。

「故」the late. 最近に死亡し、読者・聞き手がその人の生死を知らない場合につける。ラシード・パシャはヴァンペリーの旅行より5年前に死んだ。

「新しいスルタン」=Abdülaziz(在位1861-76) 本書には名は出ていない。ヴァンペリーがイスタンブルを去って後、即位した。

ボハラの君主エミール=Emir Mozaffar-ed-din(在位1860-85), Emir Nasrullah(在位1826-60) の子。(emir<Ar. amîr)

イスタンブル=コンスタンティノープル、オスマン・トルコの首都

オスマンリ=オスマン・トルコ人

セント・ペテルスブルク=ロシアの首都

V 解 説

ヴァンペリーは、自分がヨーロッパ人であることを隠して、オスマン・トルコの托鉢僧の装いをしなければならなかった。しかし時々、彼の素性は露見しそうになった。例えばヒヴァの城門に入った所にある税関で、彼のキャラヴァンは入国審査を受けた。住民が周りに集まって来て、その多くの視線がヴァンペリーを指して、djasiz (jâsûs) Ar. Per. 「スパイ」、Frenghi「ヨーロッパ人」、Urus「ロシア人」とささやくのが聞こえて、彼はどきりとした。

ヴァンペリーはヒヴァを去るに当たって、世話になったシュクルラー・ベイに挨拶に行った。ベイは彼のボハラ行きを止めるよう忠告した。その理由は、ベイの言によれば、「ボハラの君主は、イギリス人だけでなく、あらゆる外国人を憎んでいる」からである。「イギリス人」とは、ボハラへ外交使節として行き、捕らえられ、1842年6月に処刑された Colonel Charles Stoddart, Captain Arthur Conolly のふたりのイギリス軍人などを指す。ベイはヴァンペリーが西洋人であることを、見抜いていたのであろう。ベイが現役時代に、ヘラート、ペテルスブルク、イスタンブルへ行き、ヨーロッパ人と接触した経験によって、ヴァンペリーの出身を推測したのであろう。しかし勿論これを口には出さなかった。

ヘラートへ行ったのはなぜか。1837-8年、カージャール朝イランはヘラートを攻めた。イランの背後にはロシアがついていた。イギリスはヘラートをイランに渡すわけにはいかなかった。ヘラートは中央アジアやイランからアフガニスタンを経て、インドに至る唯一の交通路線に位置していた

からである。その支配者はカーブルの王家の血を引いてはいたが、カーブル政権に従属しておらず、イランとも通じていた。ヘラート防衛は当時のイギリスにとって、国際関係の最重要問題であった。インド駐屯イギリス将校 Major Eldred Pottinger がアフガン人に変装してこの町に潜入し、守備隊を鼓舞した。イギリスは一方において、イランに対して外交的圧力を加え、ついにヘラートから軍隊を撤退させることに成功した。

ポッティンガーの後を継いで、ヘラートのアフガン軍を指揮したのが、38年に入った、当時30歳の Major D'Arcy Todd である。ヒヴァのシュクルラー・ベイは39年にヘラートでトッド少佐に会ったというが（この件は上引の訳では省略されている）、それは何のためか。イギリスかロシアか、どちらかに肩入れするためか、または第三者としてか、それを決める材料は今の筆者にはない。

なおベイはヒヴァの外交官として、ロシア政府と関係をもったのであろう。このハーン国がロシアに征服されるのは、ヴァンベリーの旅行後10年してから、次のハーン、サイイド・ムハンマド・ラヒームの時である。

またベイはイスタンブルに外交官として滞在したことは、前述のとおり。

ボハラ君主がオスマン・トルコの軍事顧問を謀殺したのは、自国の軍事秘密が漏れることを恐れたからであろう。しかもあえてそれをやったのは、イスラム世界の宗主国トルコに対抗する強気の態度を表明したものである。

これと比べて、ヒヴァ君主の立場はより弱い。トルコの新しいスルタンから自分の地位を承認されることを求めて、使節を派遣しようとし、ヴァンベリーに案内を頼んだ。

これに答えて、ヴァンベリーは「kismet キスメット」と言った。この語は qismet (Ar.) で、「分けまえ、神から人に分け与えられたもの」の意味である。nasīb ともいう。イスラム教の六信の一つである qadar(天命) と同じであろう。

ヴァンベリーの同書から他の例を示す。

砂漠の旅行は種々の条件により、予定が決まらず、待たされることについて：「ナシーブがよその土地の水を飲めと命ずるまでは、この川のほとりに居なければならない」

人妻を掠奪して自分の妻とした男の言：「ナシーブが“祭日のバラ”を私にくれた」

ヒヴァのハーンに面会して、ヴァンベリーが言ったこと：「神のおかげで、私はこの高貴な幸福に浴することができ、このキスメットを特別に頂戴したことで、今後の旅行のよき前兆を見ることができます」

相手の要求に対してこの言葉を使うのは、拒絶の婉曲な表現である。つまり神の意志があればということで、自分には意志がないことを意味する。